

# 男だけの世界に強い結束力



高校時代の友人には仕事でもプライベートでも助けられているという神林光さん

仲間たちだ。

父親が検察官だった影響で、小学生の時から弁護士を目指した。高校卒業後は明治大学法学部に進学。東北大学法科大学院を修了し、2008年10月に司法試験に合格。09年12月に弁護士登録し、6年間、先輩の事務所で実績を積んだ。昨年11月、都内に自分の事務所を開設し、独立。労働や不動産取引の問題を専門にしている。

(35、1999年卒)は、首都圏などに住む卒業生でつくる京浜同窓会の幹事として、若手との交流を図る。

高校の時はサッカー部の副部長を務めた。メンバーの調和を図りながら、リーダーシップを発揮する難しさを学んだという。「毎日サッカーをした記憶しかない」と振り返るが、当時の部員は今でも付き合える大切な

裁判所や依頼者のもとを歩き来しながら、事務所では大量の資料を読みこむ日々。「依頼者の人生を背負うところに責任感とやりがいを感じています」

神林さんの同級生、高橋万太郎さん(36、1999年卒)は、全国42社80種類のしょうゆを販売する会社「伝統デザイン工房(前橋市)の社長を務める。

幼稚園から中学まで群馬大学の附属に通い、前橋高へ。高校は「女子を意識する年頃に女子がいなかったことで、男子同士の結束をとっても強く感じられた時期だった」。

地元では絵に描いたようなエリートコースを進んだが、大学受験では第1志望に失敗。地元を離れ京都の立命館大学経済学部に進学した。知り合いがだれ一人いない環境に身を置いたことが、自分で会社をおこすきっかけとなる。

人脈を作ろうと、地域の大学約40校の合同学園祭の運営にたずさわった。150人ほどで仕事を進め、自分を客観的に見つめた時、「企画力はだれにも負けない」と自分の良さを発見した。

卒業後、民間の会社に就職し、3年間営業を学ぶ。その経験をもとに、しょうゆの蔵元で勉強をし、全国の作り手400軒を一軒一軒回って商品を作ってもらおうよう説得した。

でも、なぜしょうゆ? 「しょうゆだけをまとめて売るお店ってあまりないでしょ。だれもやってないことをやりたい」と (浴野朝香)



「地元から離れたおかげで人脈づくりは今も得意。仕事に生かされています」と高橋万太郎さん